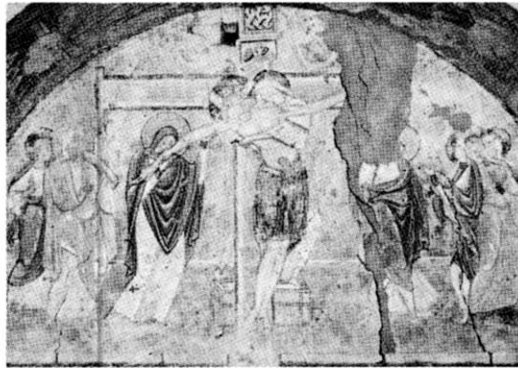


## 美術の窓(12)

サン・サヴァン教会堂のロマネスク  
壁画との邂逅(三)

大和文華館館長 吉川 逸 治



十字架降下(女関鐘塔階上廊内部の壁画)



ピエタと埋葬(同)

サン・サヴァンの塔階下の玄關廊の壁画を研究対象に限定した私は、描かれた場面の記述から始めました。これが終わった時、図像学と様式検討との二つの問題の処理に着手しました。

ここの壁画は、ヨハネの黙示録に拠った主題を扱い、奥壁に再臨のキリスト像を中心に最後の審判の諸場面、これと対照的に入口壁に以前には、神を取囲む四つの活物(いきもの)、天使群、二十四長老たちの礼讃図に殉教者群善民群の唱和する左右の場面(北場面のみ残存)があり、これら二大場面間に、蝗(いなご)の禍、女と龍、悪天使解放とユーフラテスの騎兵隊の禍、龍と天使の戦が描かれ、二人の証人の物語、ラッパをさびかる七天使などの残欠が認められました。

黙示録による神の礼讃の大構図は古代ローマの教会堂装飾の重要な主題でありましたし、すでに黙示録の本文を多数の挿絵で飾る写本類も行なわれ、カロリング帝国にもこれら古代イタリア系黙示録図像が伝えられて、四つの写本があり、そのうち二本は原本は縁枠付で九十餘図を数え、プリミティブながら、彩色線描で、製作地はトゥールかとの推測もあるのも興味を惹きます。しかし、挿絵付黙示録写本群では、十世紀末から

十一、二世紀に作られたアラビア装飾様式の影響を受けたスペインの色彩鮮烈で描線軽快なベアト本が名高く、二十余本が伝えられ、その影響はピレネーを越えてフランス全土に及んで、モアサックの神の御座はじめ、ロマネスク彫刻に多くの例が挙げられると云うのでした。しかし、ロマネスク時代のフランスは、古代ローマやカロリング時代から伝承されたところを豊かに発展させて、次のゴシック美術へと伝達させていますので、黙示録の図像についても、ベアト本の影響よりも、古代からの伝承を考慮した方がよさそうです。サン・サヴァンの壁画がこう考え直す緒口を与えてくれた訳です。

ベアト本の影響を提唱されたエミール・マール先生は、サン・サヴァンの「女と龍」がゴシック本黙示録の優れた一例の手本となっていることを指摘されて居りますし、私自身も、この壁画の「悪天使の解放とユーフラテスの騎兵隊の禍」の複雑な構図がそのまま、他のゴシック本の挿絵に採用される例を見つけました。

フランスには、サン・サヴァンの外に、オルレアンに近いロワール河畔のサン・ブノワ大修道院の一教会堂正面に十一世紀初トゥールの一画家が描いた黙示録壁画があって、各場面に記された詩句を

集録した古文書だけ残っています。私はこの詩句に拠って、失なわれた壁画の内容を復元する試みをしました。始めに大構図で、神と小羊と天使、二十四長老の礼讃、それに唱和する殉死者・万民の衆、終りに最後の審判の大構図、そして蝗の禍、悪天使の解放、ユーフラテスの騎兵隊の禍、天使と龍の戦、その傍に子を産む女、さらに二人の証人など描かれ、黙示録絵画のプログラムが、すでに成立し、しかも、カロリングの先例から、これらロマネスクの例を経て、十三世紀から中世末まで数多く作られるゴシック黙示録本の挿絵群に承継される事情が想像されます。

サン・ブノワ修道院の詩文には、最後の日の死者の復活に、黙示録が審判のため海と死と地獄がそれぞれの死者たちを返すと記すので、ビザンチン系の審判図では海陸の魚や獣、地獄の怪物が死者を吐き出す怪異な図を描くのに対し、水と陸と地獄は麦東のごとく死者の群を返すとあります。いかにも西欧中世の農耕的想像ですが、この通り、死者たちを束ねて、水の上、地の上、地獄の怪魚の開いた口の上に立たせる図がゴシック黙示録本に見出されます。このように、カロリング図像からゴシック図像

への橋渡しの役割をなしたロマネスク黙示録図の存在が痕づけられるのです。

サン・サヴァンでは、も一つ大切な図像上の特徴が見出されます。それは、女と龍の場面で、これまでは龍と天使の戦が主となって、子を孕んだ女は傍に添えられるに過ぎなかったのに、サン・サヴァンでは、女と龍の場面で、女が中心となり、聖母の姿で太陽の球に坐し、足許に三日月を踏え、頭に十二の星をめぐらし、生れた御子を天使に渡します。アダムとエバの原罪以前の事柄として、やがて無原罪のマリア像になり、倉敷の大原美術館のグレコの聖告のマリアも頭のまわりに十二の星を輝します。サン・サヴァンでは、天国の図でも、善人たちを迎えるのは太陽の光に包まれた聖母です。

聖母の姿が著しく現れるのは、新しい宗教的感受性に応じるものかと感じます。それは、塔階上廊の壁画装飾の中心をなす十字降架の大構図(写真)で、聖母が十字架から外されたキリストの右腕を両腕に抱いて頬づけし、側壁の場面(写真)では、埋葬の場面に先立ち、聖母はキリストの御頭を抱いてピエタの場面を演出なさいます。ゴシック絵画の劇的性格を予言するのです。

季刊 美のたより No.68

昭和59年 8月 23日

発行 大和文華館